序　森をめぐるコンソナンスとディソナンス

生活者からアクターへ

熱帯森林に住む人々が20世紀後半に経験した受苦を思うとき，突飛な連想かもしれないが，私は現代芸術がうみだされる契機となった二つのできごとを思いおこす。

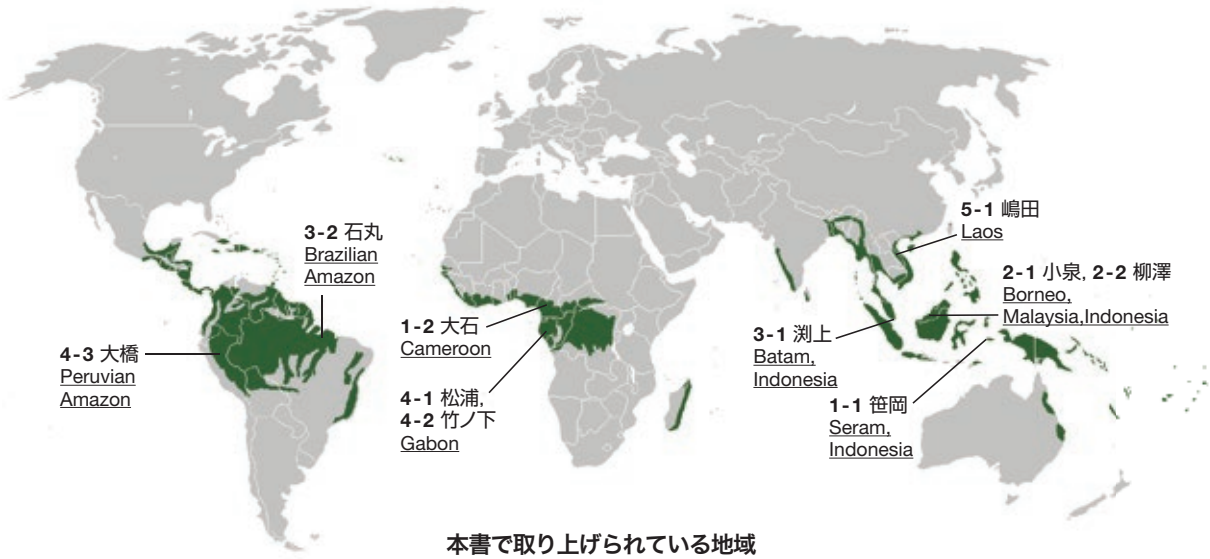
1913年，ロシアの作曲家ストラヴィンスキーの「春の祭典」のパリでの初演は，とびかう不協和音と暴力的とも言える強烈なリズムに圧倒された観客が，擁護派と反対派にわかれて罵りあい，殴りあい，けが人までででる大騒動となった。この事件に先立つ1896年，演劇「ユビュ王」のやはりパリでの初演は，役者たちがくりだす猥雑なセリフや不自然で奇妙な動作に激高した観客たちの怒号でむかえられた。観客の一人としてこの騒ぎにまきこまれた詩人のイェーツは，洗練された調和の時代の終焉と「狂暴な神」(Savage God)の支配の予感を書きのこしたが，たしかに，その後の世界には，たえまのない混乱と破壊が続くことになる。

世界システムの最周縁部といってよい熱帯森林地帯にも，20世紀の半ばころから，かつて住民たちが経験したことのない苦難がもたらされることになった。それまで，熱帯森林地域の住民はけっして孤立した生活を送っていたわけではなく，象牙，獣皮，ゴム，香木などの森林産品の交易によって外の世界とむすびついていた。しかし，外貨獲得が必要な新興国家や増加する貧困層への対応をせまられた国々において，社会経済的問題を解決する公的資源として熱帯森林が利用されるようになり，住民たちは，生活者としての主体性をうばわれることとなったのである。森林伐採，伐採跡地への人口流入，貧困層の入植，自然保護区の設置など，住民たちの意向が問われることなく，国家の手によって，かれらの生活世界であった森林に手がくわえられ，他者がはいりこみ，区画がもうけられた。

開発独裁の失敗，構造調整，民主化などによって熱帯諸国の分権化が進んだ20世紀末になって，森林住民たちは，「地域コミュニティ」や「先住民」と名づけられて，今度は，森林の「管理」に参加がもとめられるようになる。森林の保全と持続的利用というグローバルな理念にもとづく管理という舞台の上で，住民たちは，地方政府，企業，自然保護NGOなどとならんで，アクターとしてふるまうことが期待されることになったのである。

わたしたちの研究会「熱帯森林利用のローカル・ガバナンスの可能性に関する地域間比較研究」は，「森林管理」のアリーナにおかれることになった住民の状況について，現地調査にもとづくファーストハンドの知見を報告し，比較するものであった。ガバナンスは，分析概念としてはアクター間の相互作用のプロセスを指し，規範的には，各アクターが水平的な関係性において公共空間を構築していることを意味する。森林を生活世界とする住民と理念や利潤で森林を客体化する他のアクターの間でどのような交渉がおこなわれ，そこで規範的な意味でのガバナンスが達成されているのかどうかが，わたしたちが，考察しようとした課題であった。わたしたちは，森のなかから聞こえてくる音が，協和音なのか，不協和音なのか，聞きわけようとしたのである。

この冊子は，この課題について，研究会の参加者たちがラフ・スケッチのかたちでまとめた報告を編んだものであるが，報告されている地域は図のとおりである。なお，本報告集で言う「熱帯森林」とは，森林保全で使われる「熱帯湿潤林」(tropical moist forest)であり，常緑



本書で取り上げられている地域

https://commons.wikimedia.org/wiki/File%3ARain_forest_location_map.pngを改変

広葉の高木が繁茂する熱帯雨林だけではなく，熱帯季節林，低湿地林，マングローブ林などを含む熱帯密林一般を指している。

報告集の構成

この報告集は，研究会参加者が描いたラフ・スケッチをまとめたと述べたが，以下に，各章のかんたんな解題を付して，すこし感想を述べてみたい。感想については，各報告者の報告の趣旨から逸脱している場合もあるが，研究会の議論の方向性をつめることができなかった力不足のコーディネーターの反省の弁だと考えていただきたい。

１章は，20世紀末から提唱され，実践が試みられている住民参加型森林保全と森林住民の関係をとりあげている。アフリカやアジアでは，20世紀前半の植民地時代に，「原生」の森林を保護するという名目で，住民のいっさいの生業活動を禁止する公園がもうけられ，同時代に，ラテンアメリカでも同様の公園がつくられた。この種の公園は独立後もひきつづき設置されたが，上述した熱帯諸国の政治状況を背景に，1992年の国連環境開発会議などを契機として，住民と協働して森林を保全する住民参加型とよばれる管理手法が普及した。すでに述べたように，住民は，森林保全の舞台に，邪魔者としてではなく，アクターとして再登場して，管理の一翼をになうことが期待されるようになったのである。

しかしながら，１章の二つの報告は，生活者としての住民への配慮を欠いた場合，森林保全は，手続き的な住民参加によって正当化された権力装置としてはたらく可能性を示している。セラム島の報告は，このことを実証的な資料をもとに明らかにしている。カメルーンのゾウの密猟取り締まりにおける迫害の例では，住民参加は体裁でさえない。このようなガバナンスの失敗もしくは欠落に対して，住民が日常的な生活実践において，どのような抵抗を構築しようとしているのか，気になるところである。

２章と３章の４つの報告では，森林住民が，地域の社会経済事情に生計努力を適合させることをとおして，外部のアクターである自然保護NGO，地方自治体，伐採会社などとの軋轢を回避している事例が語られている。

２章のボルネオの報告では，住民たちが「地域住民」や「先住民」という外部の表象をつ

かった自主的な森林管理を構想している例が示されているが，いっぽう，３章のブラジル・アマゾンの報告では森林に入りこんできた人々が「地域住民」になろうと苦闘する姿が描かれている。これらの事例は，わたしたちが論文や報告で多用する「地域住民」という便利な言葉について，現地の文脈との関連で言葉の内実を意識しなければならないことを教えてくれる。

熱帯森林の住民は，当然ではあるが，森林の持続可能性を理念としていない。たんに，必要であれば持続的な利用をやってみるというだけである。３章のバタム島の報告は，このことを端的に示している。森林保全において，住民が動植物を持続的に利用しているように見えると在来の知として特筆され，そうでない場合は土着の愚かさとして強調されるが，いずれにせよ，生活者としての住民と関わりのない価値尺度である。むしろ，手をこまねいていては翻弄されかねない地域の社会経済状況のなかで生きぬくたくましさこそ，評価されるべきだろう。

熱帯森林住民を調査している研究者は，住民たちの「伝統的」でない生業や森林から離れた生活を見ると，生活文化が破壊された証左とみなしがちである。２章のカリマンタンの報告は，このような解釈が，観察者のノスタルジーにすぎないことを教えてくれる。研究者が問うべきなのは，その「変容」に能動性がうかがえるかどうかであり，解釈しなければならないのは，とりまく状況に対する住民たちのブリコラージュである。

４章のガボンの公園についての二つの報告は，アクターとしての研究者を描いたものである。調査成果の地域還元という抽象的な謳い文句が語られだしてから，かなりの年月が経過しているが，研究者と住民の関係について，この二つの報告は内省から発したまっすぐな問いと答えを呈示している。ペルー・アマゾンの報告も，研究者である自分が住民にどのようにあつかわれるか，共食という人間にとって基本的な生活場面から明らかにしている。

アクターとしての研究者についてさらに言うなら，研究者は，地域でデータを収集し，本国に持ち帰って加工して論文を生産し，研究者コミュニティのメリットクラシーのなかで地位の上昇に用いる。研究者は，まぎれもなく，調査をおこなっている地域のステークホルダーである。作家の開高健は，ベトナム戦争の戦地で見聞きし解釈するだけの自分を「視姦者」にたとえたが，アクターとしての研究者をさまざまな利害や価値が交錯する地域のアリーナでとらえるなら，学術調査のレジティマシーまで視野に入れて考察する必要があるだろう。

５章の報告は，ラオスの「鎮守の森」を題材に，キリスト教的な人間/自然の二項対立を乗りこえる可能性を探ったものである。この報告では，人が森を崇め，森の持つ「力」が人を律するという人と森が渾然一体となった関係が語られるが，このような関係において，森は利用される客体としての「資源」ではない。住民にとって，森の価値は，「資源」としての価値にとどまらないのである。

持続的利用や生物学的多様性保全は，熱帯森林の価値についての「希少性の語り」と言ってよい。これに対して，生まれたときから自分の世界として存在し，自分の生を支える熱帯森林は，住民にとって「豊穣」な存在である。熱帯森林の議論において，森の世界の豊穣性が，もっと語られてよいだろう。

竹内　潔